

○第1日 1限 言語研究のおもしろさ

窪 蘭 晴夫(国立国語研究所教授)

この講義では、音声研究の何が面白いのか、なぜ私が音声の研究を続けているかということを中心に日本語の例を使ってお話したいと思います。言語の研究で興味深い事象の一つは、類似の現象が時空間の違いを超えて現れるということです。音声研究においてもこれは一般的であり、しばしば言語や系統の違いを超えて、一定の方向に向かおうとする音声変化や音韻構造の潮流が観察されます。共時文法の中では言語の「普遍性」、規則の「共謀」という概念で、最近の最適性理論(Optimality Theory)の中では「普遍的制約」という概念で表されているものです。

この講義では hiatus(母音連続)と superheavy syllable(超重音節)という二つの概念を軸に、日本語にこれらの構造を避けようとする大きな潮流が観察され、これが一見異質に見える複数の規則に具現していること、そして同じ潮流が韓国語のような同系統の言語にも、あるいは英語のような異系統の言語にもよく似た形で観察されることを指摘したいと思います。たとえば hiatus については日本語に次のような現象(規則)が観察されます。

(1) 子音挿入

haru + ame → harusame(春雨)、ma + ao → massao(真つ青)

(2) わたり音挿入

piano → piyano(ピアノ)、koara → kowara(コアラ)

(3) わたり音形成

bariumu → baryuu.mu(バリウム)、iu → yuu(言う)

(4) 母音融合

naga + iki → nageki(長息=嘆き)、sugoi → sugee(すごい)

(5) 母音脱落

sumi + ire → sumire(墨入れ=すみれ)、tai + iku → taijku(体育)

この講義では、少しだけ抽象的な概念を導入することによって、一見すると関係ないように見える諸現象が関連付けられ、混沌としていた世界が整然とした姿に見えてくるということをお話しします。

○第1日 2限 言語学入門

大津 由紀雄(明海大学教授/慶應義塾大学名誉教授)

「言語学入門」と銘打たれた、この講義では言語学に関心を持ちながらも、まだ体系的に学んだ経験のないかたがたを言語学の世界への誘うことを主たる目的とします。

具体的には、

- 1 言語学の目的:なんのために言語学をするのか?
- 2 言語学の領域:言語学にはどのような研究領域があるのか?
- 3 言語学の方法:言語学研究を遂行するにあたって、どのような方法が用いられているのか?などについて、できるだけわかりやすく、例を挙げながら、解説します。

たとえば、理論言語学講座のさまざまな講義で、「統語(論)」とか、「最小対」とかという用語が使われますが、これまでそのような用語を耳にしたことがないかたや、耳にしたことはあるが、それがなにを指し、言語学研究においてどのような意味を持つのかなどについてすぐには答えられないというかたにはこの講義の受講をお勧めします。

日本社会の将来を考えると、ことばの問題を無視することはできません。ことばは思考とさまざまな形で情報の交換を支える重要なシステムだからです。しかし、いまの日本にはことばに関する俗説が横行し、ことばの教育もないがしろにされがちです。こうした状況の改善は喫緊の社会的課題です。その意味で、この講義を、言語学を学びたい、言語学の研究者を目指したいというかたがただけでなく、広くことばに関心を持つかたがたにも受講していただきたいと願っています。

また、東京言語研究所および理論言語学講座についても解説をしますので、理論言語学講座をはじめて受講することを検討しているかたがたもぜひ受講していただきたいと思います。

○ 第1日 2限 音声学 -音声の基礎とIPA-

上野 善道(東京大学名誉教授)

今年の春期講座では、音声学の基礎となる音声について全般的な概説をしたあと、本講座の見本として、IPA(国際音声字母、音声記号)の仕組みと特徴的な音声につき、時間の許す限り実際に発音をしながら話をする。予備知識は問わない。本講座とは異なり、IPAの部分でも出席者に発音や聞き取りを課することもしないので、気軽に参加してほしい。ただし、講義中にこちらが指示した動作は、みんなと一緒に必ずやってみてほしい。音声は、頭だけではなく、体で覚えることが大切なので。

○第1日 3限 認知言語学

池上 嘉彦(東京大学名誉教授)

認知言語学がどのような意味で言語研究の「新しい」流れと言えるのか。それを歴史的に少し遡って、この一世紀足らずの間に言語研究の関心と姿勢とがどのような移り変わりを経てきたかを概観することを通して、考えてみたい。

言語学の対象は何かと問えば、答えは<言語>というのが殆ど自明と思われるかもしれない。<言語>には、それと常に関わる存在として<人間>がいる。しかし、<言語>にとって<人間>との関わりがどれくらい本質的に重要であるのかは、そもそも関わる<人間>がいなくなってしまうと、<言語>というものの自体、その存在が無意味になるということを考えてみても、十

分想像できるだろう。しかも、〈言語〉にその使い手(つまり、〈話者〉)として関わる〈人間〉は、何(what)をどのように(how)話すかを自らの判断に従って決めるといって高度に〈主体的〉に振舞う存在である。

〈言語〉そのものの構造と仕組みばかりではなく、このような〈話す主体〉(‘sujet parlant’)としての〈人間〉をどのようにして言語研究の枠組みに取り込むか、この点をめぐって、この一世紀足らずの間、〈言語学〉は極めて興味深い紆余曲折を経てきた。20世紀前半の〈構造言語学〉(structural linguistics)に始まり、〈変形生成文法〉(transformational-generative grammar)、そして〈認知言語学〉(cognitive linguistics)と、一見めまぐるしいとすら思えるパラダイムの変換があった。

幸いにして、それら三つの時期をすべて身近に感じつつ過ごしてきたという立場にある者として、自らの体験をもいっぺんに交えながら、批判的に紹介してみようと思う。

○第1日 3限 社会言語学入門

嶋田 珠巳(明海大学准教授)

「言語学」の前に「社会」が付いて、「社会言語学」。言語学のすこし厳格なイメージも、「社会」言語学になるとどこことなく人間味が加わったようで、とっつきやすさを感じるでしょうか。それとも、「社会」が入った分、実際のところはもっと複雑になる、などということもあるのでしょうか。

そもそも、ことばは人が話すもの。その話者のいるところ、属している集団、社会、コミュニティ。言語を理解するのに、いちいち人を、コミュニティを意識せずには始まらない。社会言語学の面白さはそういったところから展開されます。

この講義では、日頃みなさんがすでにもっているかもしれない小さな気づき—いわば社会言語学の種のようなもの—について、また、わたしが言語学のこんなところが楽しい！ 素晴らしい！ と思っているようなことについて、お話してみたいと思います。日本語、英語、日本の方言、世界のさまざまな英語、コードスイッチング、アイルランドのこと(私にとってフィールドとよべる場所です)など。比較的自由に、それでいて社会言語学はどんなことをする学問領域かを感じていただきながら、みなさんと有意義な時間がすごせればと思います。

○第1日 4限 文法原論

梶田 優(上智大学名誉教授)

言語によって表現されるさまざまな意味のうちのあるものは、文法のなかに組み込まれて、屈折接辞、機能語、語順等々によって表わされ、意味構造の骨格(の一部)を形成します。では、どのような種類の意味が文法に組み込まれるのか、そしてどのような意味がどのような文法形式で表現されるのか。E. Sapir ほか多くの先学が取り組んできたこの根本問題は、近年では、主として「文法範疇は普遍的か」という問題として論議されていますが、事の性質上、結論はなかなか出そうにありません。理論の説明力を重んずる立場と記述の包括性を重んずる立場が対立し、両者を止揚する見通しが立たないまま、それぞ

れ別々の方向で研究を進めるという状況が続いてきました。しかし、数年前から北米先住民の言語の研究者の一部に一つの新しい動きが見え始め、これが思いがけない展開をとげて、昨年には文法範疇の普遍性を従来より一段高次のレベルに求める理論の試案が公にされました。この理論は、全体としては、他のたいていの理論と同じく静態的・出力説的な前提に立つものですが、部分的には動態的・過程説的な見方に通じる要素も含まれており、実質的な進展の一つの契機になりうるものと思われまます。今回の春期講座では、この新たな動きの大要を具体例によって説明し、そのあと通年講義で、より詳細な検討を動態的・過程説的な視点から加え、代案を示す予定です。

○第1日 4限 応用・認知言語学

大堀 壽夫(東京大学教授)

言語学の話は面白いが、それが実際にどんな役に立つのか?という質問が寄せられることがしばしばあります。もちろん、答え方もさまざまです。エンターテインメントにも貢献すれば(クリンゴンをご存知でしょうか?)、軍事利用(「ウィンドトーカーズ」は見応えのある映画でした)、さらには人類の存亡に関わる問題とも無縁ではありません(プルトニウムの半減期と言われる2万5千年の未来までどうやってメッセージを伝えればよいでしょう?)。しかし最もわかりやすい答えの一つは、「辞書作り」でしょう。これは以前から多くの成果が生まれてきた分野ですが、最近では第一にコーパス言語学、第二に認知言語学の発展によって、新しい段階へと入っています。この講義では、ふだん何気なく使っている単語をいくつか選び、日本語と英語の対照を通じて、認知言語学の応用の一つの例として、フレーム、プロトタイプ、イメージ・スキーマ、事象構造などの概念がどのように単語の使い方の記述に役立つかを示します。最後に、認知的アプローチのもとでは「単語」や「用法」という用語が新たな、そして従来よりも重要な位置づけを得ることを論じて、辞書作りのより一般的な意義を考えたいと思います。

2日目(4月19日・日)

○第2日 1限 言語心理学

佐野 哲也(明治学院大学教授)

今年度の春期講座では、第一言語獲得研究のなかで発達にかかわるいくつかの代表例を紹介します。

他の認知能力と同様に言語能力のなかには時間軸にそって発達するものがあります。こどもの言語発達には「初期には大人の場合と異なるもの」が観察されることがあります。

こどもが通常第一言語を容易に獲得することを考えるとこどもには生まれつきの言語能力が

備わっていると考えられますが、それにもかかわらず「初期には大人の場合と異なるもの」が観察されるのはなぜなのか、というのが第一言語獲得研究のなかで発達にかかわる一つの大きな問いになると考えられます。

今年度の春季講座「言語心理学」では、この問いについての諸研究を整理して紹介します。これは「言語心理学」研究の興味深い一例になります。

具体的なトピックの一つは受身文、非対格文(unaccusative)、繰り上げ構文(raising)に共通してみられる発達の遅れです。これらの構文と日本語の主格目的語構文をくらべることで、ここでとりあげられている発達の遅れの原因について考察します。

これらの諸研究から、「初期には大人の場合と異なるもの」がこどもの言語発達において観察されるのはなぜなのかという問いについて、答えの可能性をしばらくこんでいく試みについておはなしします。

○第2日 1限 日本語文法史—動詞の自他とその周辺—

川村 大(東京外国語大学准教授)

古代日本語の文法を勉強する面白さにはいろいろな側面があって、「①ひとつの言語の文法を研究すること自体の面白さ」「②現代(共通)語の文法がこのようにあることの由来を明らかにすることの面白さ」もさることながら「③現代語文法(あるいは現代語文法をめぐる理論的理解)を相対化し、文法に関する思索を一段深めることの面白さ」を見逃すことはできません。今年度の講義では、いわゆる「動詞の自他対応」や、周辺形式である動詞サセル形・ラレル形を材料に、古代語日本語を見ることの面白さの一端を見てみたいと思います。春季講座ではその予告編として、講義で取り上げるいくつかの論題を示し、その難しさと面白さを御紹介できればと思います。目下、次のような論題を考えています。

- ・「取る」に対する「取れる」の-eru は自動詞派生接辞か。
- ・自他対応形成の様式と、派生自動詞あるいは派生他動詞の意味との間に積極的な対応関係はあるのか。
- ・いわゆる動詞ラレル形は、有対自動詞とどこまで共通で、どのように異なるのか。

○第2日 2限 日本語の「文法」を考えると

三宅 知宏(鶴見大学教授)

①日本語文法に関して、一般言語学(言語理論)の基礎としての知識を得たい方、②日本語文法に関して、日本語教育を行う上での知識を得たい方、③日本語文法に関して、専門的な研究を進める上での知識を得たい方、④日本語、特に文法の分野に関して、知的興味を持っている方。

上の①～④のいずれかに該当する方を対象にして、日本語の文法について考える(研究を始める)ことの導入になるようなお話をさせていただこうと思います。「導入」などと言うと、少しか

たいですが、要するに、日本語文法研究の“つかみ”ということです。

お話しすると言っても、一方的にこちらが話し続けるのではなく、具体的なデータに基づいて、一緒に考えながら、そして議論しながら、進めます。

受講にあたっての特別な知識は必要としません(もちろん、専門的な知識を既に持つ方の受講も拒みません)。また、日本語を母語としているかどうかも問いません。

日本語の文法について考えてみる(研究を始める)きっかけとなるような時間にしたいと思います。

○第2日 2限 語形成論 —接辞の意味とシンタクス—

杉岡 洋子(慶應義塾大学教授)

一般に、語という単位における形と意味の結びつきは、恣意的でレキシコン(心的辞書)に記憶されるのに対して、句や文の意味は、イディオムなど特殊なケースを除いて、それらを構成する語の意味と統語規則や構文規則によって説明できるものである。語形成論で扱う複雑語という単位は、その中間にあり、「壁ぬり」のように意味が透明で自明なものから、最近の流行語になった「壁ドン」のように部分から全体の意味が予測できない例まで、様々なケースが混在している。

この講義では、接辞の意味が語形成に果たす役割について考えていく。接辞は単体では使えず語に付いてはじめて意味を成す「語未満」の存在だが、さまざまな形で「相手」を選び好みする。たとえば、「真昼」という語の「真(ま)」という接辞が、「*真朝、*真夜」のような語が作れないのはなぜだろうか。また、「真っ裸」と「素っ裸」は同じ意味だろうか。また、「働きぶり、働き方」は両方とも使えるが、「仕事ぶり」と言えるのに対して「*仕事方」と言えないし、野球の「投手」と「打者」を「投者」と「打手」とは呼ばないのはなぜだろうか。このような問いに答えながら、また実際に語を作って一緒に考えながら、私たちの言語知識の一部である接辞の意味とシンタクスの一旦を解明する。

○第2日 3限 生成文法

高橋 将一(一橋大学准教授)

私たちは、単語を一つもしくは、複数個用いて文などの表現を作り、ある意味を伝達しています。複数の単語を使用して表現を作る場合、一見すると単語は単に並列的に配置されているだけのように思えます。しかし実際には、それらの単語の間には、様々な関係性が存在しています。例えば、John saw the man with the binoculars という文において、隣接する単語である the と man は、強く結び付いていると感じるかもしれませんが、saw と the に対しては同様の感覚を持たないのではないのでしょうか。また、上記の文には、「ジョンが双眼鏡を持っている男性を見た」と「ジョンが双眼鏡で男性を見た」という二つの解釈が存在します。一つ目の解釈では、with

the binoculars は the man を修飾しており、両者の間には強い結び付きが存在すると考えられます。二つ目の解釈では、with the binoculars は the man でなく、saw the man を修飾し、上記の関係性が存在すると思われます。生成文法では、言語表現において、単語が画一的に結び付いているわけではないということを、言語には構造関係が存在する考えることで捉えています。私たちは、「併合」と呼ばれる操作を使用して言語の構造を構築していると想定されています。本講座では、まず言語表現には、構造関係が存在するということを示していると思われる証拠を概観します。そして、併合が、実際にどのように行われ、どのような制約が課せられているのか、またどのような構造が、この併合により作り出されるのかといった点を検討していきます。最後に、併合の適用方法に対してある制約を課すことで説明することが可能になる言語現象を紹介しします。言語を使用するうえで必要不可欠であると考えられている構造を構築する能力に関する諸問題を検討することで、私たちの言語に対する理解を深めていきたいと思っています。

○第2日 3限 「言外の意味」の意味を考える

西山 佑司(慶應義塾大学名誉教授)

「言外の意味を読め」という言い方がしばしばなされる。言葉の文字通りの意味ではないところの意味を理解するということであるが、ひと口に「言外の意味」といっても一様ではない。次の三つのケースを見よう。

[A] 日本人の言う「考えておきます」という言葉は、《お断りします》という意味なんだよ、そういう言外の意味が読めないようでは、日本人とのコミュニケーションがうまくできないよ。

[B] ・ (1)において太郎は、花子の発話から《玄関の掃除をしてください》という言外の意味を読み込んだ。

(1) a. 太郎: なにか手伝うことありますか。

b. 花子: 玄関の掃除がまだなの。

・ (2)において太郎は、花子の応答を《花子は今流れている音楽は好きでない》という言外の意味を表すものと理解した。

(2) a. 太郎: 今流れている音楽、どう思う。

b. 花子: わたくし、12音技法の音楽って好きになれないの。

[C] ・ 花子の発話(3)を聞いた太郎は、《2015年の元日の朝、太郎は、花子の家の庭で、花子の妹の洋子にキスをした》という言外の意味を瞬時に理解した。

(3) [花子→太郎] あの時、あなたは彼女にあそこでキスをしましたね。

・ (4)の言外の意味は《彼女は自分の父親を庭で銃殺した》である。

(4) She took out the gun, went into the garden and she killed her father.

[A] [B] [C]は本質的にどこが異なるのであろうか。「言外の意味」と「言内の意味」とのつながりはいかなるものであろうか。言外の意味は言内の意味からどんなに離れていても可能なのだら

うか。(5)のようないわゆるメタファー表現の理解は言外の意味の理解の典型と思われるが、それは[A] [B] [C]のいずれに属するのであろうか。

(5) うちの社長はブルドーザーだ。

なぜ、われわれは相手に言いたいことを言葉で伝えるのに、それを言内の意味として表現しないで、わざわざ言外の意味に託すのであろうか。この講義ではこういった問題を多くの具体例で考え、皆さんを語用論 (pragmatics)の世界へ誘いたいと思う。

○第2日 4限 日本語意味論

尾上 圭介(東京大学名誉教授)

文は語が集まって構成される。語はそれぞれに意味を持っている。したがって文の意味は、語があらかじめ持っている意味が集まってでき上がる。(文の意味は語の意味の総和である。)―それは疑いようがないことのようにも思われる。しかし、そう簡単に言ってしまうのであろうか。

「風もないのに、木の葉が散る」という時の「も」の意味とは何であろうか。常識に沿って「も」は〈並列〉という意味を持っていると言いたいところだが、冒頭の例では「風」と何とを並べているのであろうか。「も」自身に意味はないのだ、前後から構成される意味がたまたま「も」の意味として感じられるまでのことだと居直るなら、そこにある助詞が「も」でなければならない理由をどのように求めることができるのか。言うまでもなく、この「も」を「は」や「が」に置き換えてもほぼ似た意味の文になる。けれども、「風もないのに」と「風はないのに」と「風がないのに」とでは意味のある側面が微妙に違う。その微妙に異なる意味は、それぞれの助詞があらかじめ自身の内に抱え込んでいたものなのであろうか。

「木の葉が散る」は、この場合、今まさに散っている情景を見た描写であろうが、その内容はむしろ「木の葉が散っている」とシテイル形で言うこともできる。ある場合に限ってスル形の意味とシテイル形の意味とが重なるというのは、どういうことであろうか。スル形自身には意味はないのか。

助詞や助動詞、活用形など文法形式があらかじめ自身の内に固有の意味を持っていて、それが集まって文の意味を構成するのだという信仰は、どの程度正しいのか。そもそも文法形式自身の性格とそれが使われて文にもたらされる意味とはどのような関係にあるのだろうか。

文法形式の多義性の構造を考えることを出発点として、「意味」というものの多様な側面に光を当ててみたい。

○第2日 4限 言語哲学入門

酒井 智宏(早稲田大学准教授)

言語哲学は理論言語学の一部門ではありません。それなのにどうして言語哲学の講義が理論言語学講座の中に置かれ、「言語哲学入門」が春期講座の中に含まれているのでしょうか。

言語はさまざまな顔をもつ複雑な対象で、「言語を一般的に分析する」ことなどではできません。それは「リンゴを一般的に分析する」ことができないのと同じことです。リンゴが木から落ちるのを見て、「おいしそうなリンゴだ」と思うか、「真っ赤なリンゴだ」と思うか、「大きなリンゴだ」と思うか、「禁断の果実だ」と思うか、「万有引力が働いている」と思うかは、その人の観点によるのであって、どれが正しくどれがまちがっているということではありません。これと同じで、言語へのアプローチにも、科学的なもの、社会学的なもの、政治学的なもの、法学的なもの、哲学的なもの、などなどがあり、これらのうち科学的なアプローチをとるのが理論言語学で、哲学的アプローチをとるのが言語哲学です。どちらがよりすぐれていると言ったことではなく、それぞれ観点（あるいは守備範囲）が異なっているわけです。

なるほど・・・いや、これでは「どうして理論言語学講座の『中』に言語哲学の講義が置かれているのか」という最初の問いに答えたことにはなりません。理論言語学とは別に言語哲学という分野があるのであれば、言語哲学は理論言語学講座の「外」に置かれるべきものです。そして実際、理論言語学の教科書ではそのように扱われています。

この講座では、この常識に反し、言語の科学的分析を深めていくと、どこかで科学の枠を越えて哲学の領域に侵入していかざるをえないということ、それゆえ「理論言語学と言語哲学では言語を分析する際の観点（あるいは守備範囲）が異なる」といったのんきな物言いではすまされないということを納得していただこうと思います。とりあげる題材は昨年度と異なるものにします。